

大学におけるデート DV 防止のための 視覚教材の制作と教育効果の検討

西本 佳代 (大学教育基盤センター講師)

大沼 泰枝 (学生支援センター講師)

大久保智生 (教育学部准教授)

1. はじめに

本稿の目的は、香川大学において制作したデート DV 防止のための視覚教材について報告し、その教育効果についてアンケート調査の結果をもとに検討することにある。

本誌掲載の「大学生の問題行動防止を目的とした動画制作と授業実践」(本誌 109 - 118 頁)に詳述したとおり、教育担当理事の依頼を受け、香川大学生の不祥事防止を目的とした動画を制作することとなった。動画を制作するのであれば、できるだけ学生の実態に近く、学生の関心をひくものにした。そのため、まずは1年生を対象としたアンケート調査を実施し、比較的該当者の多かった、未成年飲酒、飲酒後の自転車運転、自転車の無断借用、SNS の間違っただ利用を核として、動画を制作した。

同アンケート調査の結果、デート DV については、該当者が少なく、香川大学で見聞きしたことがない者がほとんどであることが明らかとなった(大久保・西本、2016)。この結果だけをみれば、デート DV 防止のための視覚教材を制作する必要がないように思われるかもしれない。しかし、これは1年生を対象とした調査結果であり、今後デート DV の問題に学生たちが巻き込まれる可能性は大いにある。内閣府の調査によれば、成人女性の約2割が交際相手から被害を受けたことがあるという(内閣府、2015)。そこで、上述の問題行動とは別に、デート DV 防止を目的とした視覚教材も制作することにした。

視覚教材の制作にあたり、既存のデート DV 防止を目的とした動画について調査した。地方自治体を中心にいくつかの動画が制作されているのだが、そこで描かれているのは、主に当事者の視点であることが確認できた。例えば、いかにデート DV の被害者にならないようにするか、被害者になったときにどうすればよいのか、という内容である。確かに、そのようにしてデート DV の被害者にならないように呼び掛けることは重要である。しかし、大多数の学生がデート DV の経験がなく、見聞きもしていない香川大学1年生の場合、当事者の視点だけを描くと他人事として認識される可能性が高い。そのため、デート DV の問題を抱えた当事者の友人の視点で、どのようなかわり方ができるのか、考えてもらうことを想定して、視覚教材の台本づくりを依頼した¹⁾。本稿では、こうした経緯で制作されたデート DV 防止のための視覚教材の内容について報告し、その教育効果についてアンケート調査の結果をもとに検討する。

以下では、デート DV 防止のための視覚教材の内容と企画意図を報告し（第二節）、視覚教材視聴者を対象として実施したアンケートの調査目的（第三節）、調査方法（第四節）、調査結果（第五節）について説明した後、視覚教材の教育効果と課題について考察（第六節）する。

2. 視覚教材の内容と企画意図

制作した視覚教材「あなたの好きな人～デート DV から守りたい～」の主な登場人物は四名、まどか、沙希、航平、タツヤである²⁾。まどかと航平は交際しており、それぞれデート DV の被害者（まどか）、加害者（航平）の関係にある。沙希はまどかの友達であり、調査（大久保・西本・影山、2017）から得られた香川大学女子学生の傾向を参考に、キャラクターを設定した³⁾。一方のタツヤは航平の友達であり、同調査から得られた香川大学男子学生の傾向を参考に、キャラクターを設定した。

物語は、大きく次の五つの場面から描かれる。冒頭、まどかと航平が会おう。まどかは中学校時代、先輩である航平に憧れていた。しかし、当時は憧れるだけで声をかけることができなかった。時を経て、まどかは大学に入学し、大学の図書館で偶然、航平に出会う。その後、勇気を出してまどかは告白し、二人はつきあうことになる。まどかにとって航平は初めての彼氏である。

はじめは上手くいっていた二人の関係だが、だんだんと航平の束縛が強くなる。例えば、アルバイトについて。まどかはマンガ喫茶でアルバイトをしているが、そこに男性客が多く訪れることを不快に思い、航平はまどかにアルバイトを辞めるように言う。また、航平がまどかの携帯電話を勝手に見て、男性の登録を全て消すように指示し、会うたびに携帯電話のチェックをするようになる。

こうした二人の関係について話を聞いていたまどかの友人・沙希は、「やっぱり、おかしいと思う！」と、航平を止めようとする。一方、航平の友人・タツヤは、「暴力じゃないし…」「恋愛は他人が口出すことじゃない」と関与することに及び腰である。結局、沙希は、タツヤの静止を振り切り、航平を呼び出して、航平の言動の問題点を指摘する。すると、航平はまどかの部屋に戻り、まどかに暴力を振るいながら、沙希と友達をやめること、自分にはまどかしかないこと等を告げる。

その後、まどかは大学に出てこなくなる。心配した沙希やタツヤたちが、まどかの部屋に行っても会うことはできない。そこで沙希やタツヤたちは、チラシを頼りに弁護士に相談に行く。弁護士から、まずはまどか自身がデート DV の被害にあっていると自覚することが必要だというアドバイスをもらう。

沙希はまどかの部屋に通い続け、やっとまどかに会うことができた。まどかの部屋には航平が入り浸っている。このまま部屋を出て、航平と別れるように言う沙希に対して、まどかは「先輩には私が必要なの」と聞く耳をもたない。それでも沙希は説得を続け、アザ

だらけのまどかを抱きしめて「私がまどかを守るから！」と言う。デートDVの被害者であることを自覚したまどかは、弁護士に相談し、航平に別れを告げる。

以上が物語の展開であるが、この展開を考えるにあたり、次の三点に留意した。第一に、デートDVの被害者の友人の立場で視聴できるということである。先に述べたとおり、沙希とタツヤのキャラクターは、香川大学生を対象とした調査の結果をもとに、考えられている。具体的には、友人がデートDVの問題を抱えたとき、男性は話題を回避するが女性はアドバイスする傾向にある。こうした特徴を持った友人を物語に登場させることで、学生たちが沙希やタツヤの立場でこの動画を視聴できるように工夫した。

第二に、デートDVに関する知識を伝えるということである。香川大学生を対象とした調査では、特に男性は、知識がないことによってデートDVを許容したり、容認したりする傾向がみられた。そのため、デートDVに関する教育を行う際には、何がデートDVに該当するのか示し、それが許されない人権侵害であることを伝える必要がある（大久保・西本・影山、2017）。調査結果に基づくこの考察を参考に、物語中にはできるだけ多くのデートDVに該当する行為を盛り込み、視聴した学生がそれらを「デートDV」としてカテゴリー化できるようにした。具体的には、先述したアルバイトを辞めさせることや携帯電話のチェックをすることの他にも、避妊をしないことやお金を借りることを登場人物のセリフの中に盛り込み、視聴した学生が「デートDV」のひとつとして位置づけられるようにした。

第三に、周囲の人間が、デートDVの被害者を孤立させず、支援し続けることの重要性を伝えるということである。先述のとおり、本視覚教材は、友人の立場でデートDVの被害者に何ができるのか、考えてもらうことを目的としている。その答えのひとつとして想定されるのが、被害者の意識が変化するまで支援し続けるということである。一般に、DVには「蓄積期」「爆発期」「安定期」といった周期があり、被害者が抜け出しにくい構造になっているとされる。暴力を振るわれたとしてもその後に加害者から謝罪されると、改善を期待するために被害者はなかなか別れを決意できない。そうした状況下で、友人から強く別れるようにすすめられても聞くことはできない。むしろ、アドバイスされたくないために友人を避けることも考えられる。一方、友人もせっかくのアドバイスを聞かない被害者を理解できず、だんだんと疎遠になる。そして、孤立した被害者は加害者と二人だけの世界に入っていく。こうした悪循環が予想されるため、周囲の人間は、被害者の視点を尊重しつつ、孤立させないことが重要になる。もちろん、被害者の視点を尊重するといってもデートDVを容認してよいわけではない。デートDVは容認できない人権侵害であり、その被害を受けていると自覚すること、そしてそこから抜け出したいと被害者が思えるようになるまで、友人たちは辛抱強くよりそう必要がある。そのことを、まどかと沙希との関係を通して伝えられるよう留意した。

3. 調査目的

以上、3点に留意し制作した視覚教材「あなたの大好きな人～デートDVから守りたい～」であるが、制作者の意図通りに学生が視聴しているとは限らない。この視覚教材は単に視聴して終わりではなく、これを用いて授業を行うことを前提に制作されている。そのため、視覚教材の視聴だけでは理解が不十分な点を把握し、それを補てんする授業内容を構成する必要がある。そこで、視覚教材を視聴した学生を対象としたアンケートを実施し、視覚教材がどのように受け止められているのか調査することにした。

4. 調査方法

4-1. 対象者

香川大学の2017年度第1クォーターの主題A科目「キャンパスライフ入門」と「身近な生活における支援を考える」を受講した学生166名を対象に調査を実施した。調査回答者は、教育学部21名、法学部8名、経済学部19名、医学部27名、工学部62名、農学部29名であった。男女比は、男性89名、女性77名であった。

4-2. 手続き

本調査は、2つの主題A科目で調査を実施した。授業の進め方やDVDを見せるタイミングによる調査への影響を統制するため、両授業ともデートDVに関する講義を行う前にDVDを視聴させ、視聴直後に調査を実施することとした。なお、調査実施に際し、調査への協力は任意であること、調査への回答と成績に関係がないこと、調査結果は研究成果の発表のみに使用されること等を伝えることで、倫理面への配慮を行った。

4-3. 質問紙の構成

調査用紙は、以下の5つから構成された。

- (1) フェイスシート：回答者の年齢、性別、学年、学部について尋ねた。
- (2) 視覚教材の印象：DVDを視聴した印象を測定するために、「良いと思った」、「勉強になった」、「デートDVへの関心が高まった」、「今後の生活に生かせると思った」の4項目を尋ねた。「動画を視聴してどのように感じましたか」という教示の下、「全くそう思わなかった：1点」、「そう思わなかった：2点」、「どちらともいえない：3点」、「そう思った：4点」、「とてもそう思った：5点」の5件法で回答を求めた。
- (3) デートDVに関する理解度：デートDVに関する理解度を測定するために、「デートDVとはどのようなものなのかわかった」、「デートDVは人権侵害であることがわかった」、「デートDVを許容しないことが重要だとわかった」、「デートDVが起きても相談先があることがわかった」、「デートDVをする人は暴力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった」の5項目を尋ねた。「動画を視聴してどのように感じまし

たか」という教示の下、「全くそう思わなかった：1点」、「そう思わなかった：2点」、「どちらともいえない：3点」、「そう思った：4点」、「とてもそう思った：5点」の5件法で回答を求めた。

(4) デートDVに関する規範意識:デートDVに関する規範意識を測定するために、大久保・西本・影山(2017)が作成した「デートDVの容認」、「デートDVの否定」の2因子からなる「デートDVに関する規範意識尺度」12項目を尋ねた。「デートDVについて、あなたの考え方に合うものに○を付けてください」という教示の下、「そう思わない:1点」、「どちらかというと思わない:2点」、「どちらかというと思おう:3点」、「思う:4点」の4件法で回答を求めた。

(5) 友人のデートDVへの対処:友人がデートDVの問題を抱えていた場合の対処行動を測定するために、大久保・西本・影山(2017)が作成した「友人のデートDVへの対処尺度」から、本調査に合うように文言を修正した上で6項目を尋ねた。友人のデートDVへの対処尺度は「話題の回避」「友人への助言」「意見の尊重」の3因子から構成されていることから、「話題の回避」の因子からは、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、相談されないように、デートDVの話題をさげたい」、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、当人同士の問題なので、関わらないようにしたい」の2項目、「友人への助言」の因子からは、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、友人にそんな目にあっていいはずがないと言いたい」、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、信頼できる大人や相談機関に話せるようにサポートしたい」の2項目、「意見の尊重」の因子からは、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、友人が嫌がっていること(無理やり別れさせるなど)を無理やりさせようとしたくない」、「友人がデートDVの問題を抱えていたら、自分の考えやアドバイスを押し付けないようにしたい」の2項目の計6項目を使用した。「動画を視聴してどのように感じましたか」という教示の下、「全くそう思わなかった：1点」、「そう思わなかった：2点」、「どちらともいえない：3点」、「そう思った：4点」、「とてもそう思った：5点」の5件法で回答を求めた。

5. 調査結果

5-1. 視覚教材の印象

デートDVに関する視覚教材の印象を尋ねる4項目について、記述統計量を算出した(表1)。その結果、「良いと思った」、「勉強になった」については、平均値が4点を超えており、「とてもそう思った」もしくは「そう思った」と肯定的な回答をした回答者の割合はそれぞれ約8割、約9割であった。「デートDVへの関心が高まった」「今後の生活に生かせると思った」については、両方とも平均値が3.92であり、「とてもそう思った」もしくは「そう思った」と肯定的な回答をした回答者の割合はそれぞれ約7割であった。以上の結果から、デートDVに関する視覚教材は視聴した大学生にとって肯定的な印象を抱かせるものであることが明らかとなった。

表1 視覚教材の印象の記述統計量

	全くそう 思わなかった	そう 思わなかった	どちらとも いえない	そう思った	とても そう思った	M	SD
良いと思った	5 (3.0)	5 (3.0)	22 (13.3)	81 (49.1)	52 (31.5)	4.03	0.92
勉強になった	0 (0.0)	2 (1.2)	12 (7.2)	92 (55.4)	60 (36.1)	4.27	0.64
デートDVへの関心が高まった	1 (0.6)	7 (4.2)	32 (19.3)	90 (54.2)	36 (21.7)	3.92	0.79
今後の生活に生かせると思った	3 (1.8)	5 (3.0)	37 (22.3)	79 (47.6)	42 (25.3)	3.92	0.87

注：()内はパーセント。以下同様に表記。

5-2. デートDVに関する理解度

デートDVに関する理解度を測定するための5項目について、記述統計量を算出した(表2)。その結果、全ての項目で平均値が4点を超えており、「デートDVとはどのようなものかわかった」、「デートDVは人権侵害であることがわかった」、「デートDVを許容しないことが重要だとわかった」、「デートDVが起きても相談先があることがわかった」については、「とてもそう思った」もしくは「そう思った」と肯定的な回答をした回答者の割合は9割以上であった。以上の結果から、デートDVに関する視覚教材は視聴した大学生にとってデートDVに関する理解を促進するものであることが明らかとなった。

表2 デートDVに関する理解度の記述統計量

	全くそう 思わなかった	そう 思わなかった	どちらとも いえない	そう思った	とても そう思った	M	SD
デートDVとはどのようなものかわかった	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (4.2)	79 (47.6)	80 (48.2)	4.44	0.58
デートDVは人権侵害であることがわかった	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (2.4)	69 (41.6)	93 (56.0)	4.54	0.55
デートDVを許容しないことが重要だとわかった	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.8)	64 (38.6)	99 (59.6)	4.58	0.53
デートDVが起きても相談先があることがわかった	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (3.6)	75 (45.2)	85 (51.2)	4.48	0.57
デートDVをする人は暴力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった	0 (0.0)	3 (1.8)	16 (9.7)	83 (50.3)	63 (38.2)	4.25	0.70

5-3. 視覚教材の印象、デートDVに関する理解度とデートDVに関する規範意識、友人のデートDVへの対処の性差

デートDVに関する視覚教材への印象、デートDVに関する理解度、デートDVに関する規範意識および友人のデートDVへの対処について、性別による差があるかどうか検討するため、それぞれt検定を行った(表3)。その結果、視覚教材の印象では、「良いと思った」($t(163)=2.71, p<.01$)において、女性のほうが有意に高く、「勉強になった」($t(164)=1.85, p<.10$)および「今後の生活に生かせると思った」($t(163.78)=1.92, p<.10$)において、女性のほうが高い傾向にあった。デートDVに関する理解度では、「デートDVをする人は暴

力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった」(t(163)=1.82, p<.10)において、女性のほうが高い傾向にあった。デートDVに関する規範意識では、「容認」(t(153.89)=2.98, p<.01)において、男性のほうが有意に高かった。友人のデートDVへの対処では、「話題の回避」(t(164)=3.21, p<.01)において、男性のほうが有意に高く、「友人への助言」(t(163)=2.73, p<.01)において、女性のほうが有意に高かった。以上の結果から、デートDVに関する視覚教材を視聴した大学生のうち、女性のほうが視覚教材に肯定的な印象を抱き、デートDVをする人の特徴についても理解が促され、デートDVを容認しないことが明らかとなった。さらに、女性のほうが友人のデートDVへの対処としては話題を回避せずに、友人への助言を行いたいと考えることが明らかとなった。

表3 性別ごとの各尺度の平均値とt検定の結果

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
＜視覚教材の印象＞					
良いと思った	3.85	1.02	4.23	0.74	2.71**
勉強になった	4.18	0.68	4.36	0.58	1.85†
デートDVへの関心が高まった	3.85	0.75	4.00	0.84	1.18
今後の生活に生かせると思った	3.80	0.93	4.05	0.78	1.92†
＜デートDVに関する理解度＞					
デートDVとはどのようなものなのかわかった	4.40	0.60	4.48	0.55	0.85
デートDVは人権侵害であることがわかった	4.53	0.57	4.55	0.53	0.20
デートDVを許容しないことが重要だとわかった	4.52	0.57	4.65	0.48	1.63
デートDVが起きてても相談先があることがわかった	4.44	0.58	4.52	0.55	0.92
デートDVをする人は暴力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった	4.16	0.77	4.36	0.61	1.82†
＜デートDVに関する規範意識＞					
容認	10.31	2.91	9.15	2.04	2.98**
否定	15.11	3.24	15.13	2.17	0.04
＜友人のデートDVへの対処＞					
話題の回避	4.26	1.70	3.42	1.68	3.21**
友人への助言	8.05	1.66	8.70	1.39	2.73**
意見の尊重	6.19	1.64	5.92	1.55	1.08

注：**p < .01, *p < .05, † p < .10。以下同様に表記。

5-4. 視覚教材の印象、デート DV に関する理解度とデート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処との関連

視覚教材の印象、デート DV に関する理解度とデート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処との関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した（表 4）。その結果、概して、視覚教材の印象はデート DV に関する規範意識の容認、友人のデート DV への対処の話題の回避、意見の尊重とは有意な負の関連が示され、友人のデート DV への対処の友人への助言とは有意な正の関連が示されたが、デート DV に関する規範意識の否定とは有意な関連は示されなかった。またデート DV に関する理解度の「デート DV とはどのようなものなのかわかった」、「デート DV は人権侵害であることがわかった」はデート DV に関する規範意識の容認、友人のデート DV への対処の話題の回避とは有意な負の関連が示され、友人のデート DV への対処の友人への助言とは有意な正の関連が示されたが、デート DV に関する規範意識の否定、友人のデート DV への対処の意見の尊重とは有意な関連は示されなかった。「デート DV を許容しないことが重要だとわかった」はデート DV に関する規範意識の容認、友人のデート DV への対処の話題の回避とは有意な負の関連が示され、友人のデート DV への対処の友人への助言とは有意な正の関連が示されたが、デート DV に関する規範意識の否定、友人のデート DV への対処の意見の尊重とは有意な関連は示されなかった。「デート DV が起きても相談先があることがわかった」は、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処とは有意な関連は示されなかった。「デート DV をする人は暴力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった」はデート DV に関する規範意識の容認、友人のデート DV への対処の意見の尊重と有意な負の関連が示され、友人のデート DV への対処の友人への助言とは有意な正の関連が示されたが、デート DV に関する規範意識の否定、友人のデート DV への対処の話題の回避とは有意な関連は示されなかった。以上の結果から、概して、視覚教材の肯定的な印象やデート DV に関する理解度が高まると、規範意識が高まり友人のデート DV へ積極的に対処することが明らかとなった。

次に、デート DV に関する規範意識が友人のデート DV への対処に及ぼす影響について、重回帰分析を行った（表 5）。その結果、友人のデート DV への対処の話題の回避に対しては、デート DV に関する規範意識の容認（ $\beta = .301$, $p < .01$ ）と否定（ $\beta = .205$, $p < .01$ ）の有意な正の影響が示され、性別（ $\beta = -.196$, $p < .01$ ）の有意な負の影響が示された。友人への助言に対しては、デート DV に関する規範意識の容認（ $\beta = -.360$, $p < .01$ ）の有意な負の影響が示された。意見の尊重に対しては、デート DV に関する規範意識の容認（ $\beta = .172$, $p < .05$ ）の有意な正の影響が示された。以上の結果から、デート DV を容認する場合も、否定する場合も話題を回避しやすくなることが明らかとなり、性差の影響も大きいことが明らかとなった。また、デート DV を容認しない場合は友人への助言をしやすくなり、容認する場合は意見を尊重しやすくなることが明らかとなった。

表4 視覚教材の印象、デートDVに関する理解度と友人のデートDVに関する規範意識、デートDVへの対処の相関係数

	デートDVに関する規範意識		友人のデートDVへの対処		
	容認	否定	話題の回避	友人への助言	意見の尊重
＜視覚教材の印象＞					
良いと思った	-.178*	-.002	-.196*	.177*	-.163*
勉強になった	-.432**	-.015	-.267**	.314**	-.200*
デートDVへの関心が高まった	-.274**	-.146†	-.192*	.201*	-.163*
今後の生活に生かせると思った	-.296**	-.102	-.236**	.288**	-.074
＜デートDVに関する理解度＞					
デートDVとはどのようなものなのかわかった	-.207**	.043	-.202**	.288**	-.091
デートDVは人権侵害であることがわかった	-.159*	.005	-.180*	.235**	-.082
デートDVを許容しないことが重要だとわかった	-.295**	.010	-.331**	.377**	-.152†
デートDVが起きても相談先があることがわかった	-.137†	.010	-.089	.120	-.048
デートDVをする人は暴力をふるった後にやさしくなり、される人も許してしまうことがわかった	-.181*	-.003	-.150†	.223**	-.183*

表5 重回帰分析の結果

	標準化係数 (β)		
	話題の回避	友人への助言	意見の尊重
容認	.301**	-.360**	.172*
否定	.205**	-.005	.067
性別	-.196**	.127†	-.073
重相関係数	.437**	.408**	.210†

6. おわりに

本稿では、香川大学において制作したデートDV防止のための視覚教材の内容と企画意図を報告し、視聴した学生を対象に行ったアンケート調査の結果を検討してきた。最後に、

アンケート調査の結果をまとめ、視覚教材の教育効果と課題について考察する。

アンケート調査からは、次の点が明らかになった。デート DV に関する視覚教材は、視聴した大学生にとって肯定的な印象を抱かせ、デート DV に関する理解を促進するものであった。デート DV に関する視覚教材を視聴した大学生のうち、女性のほうが肯定的な印象を抱き、デート DV をする人の特徴についても理解し、デート DV を容認せず、友人のデート DV への対処としても話題を回避せずに、友人への助言を行いたいと考える傾向にあった。また、概して、視覚教材の肯定的な印象やデート DV に関する理解度が高まると、規範意識が高まり友人のデート DV へ積極的に対処すること、デート DV を容認する場合も、否定する場合も話題を回避しやすくなり、性差の影響も大きいことが明らかとなった。さらに、デート DV を容認しない場合は友人への助言をしやすくなり、容認する場合は意見を尊重しやすくなることも明らかとなった。

これらの結果から、まずは、本視覚教材がデート DV 防止のために一定の役割を果たしているといえるだろう。アンケート調査の結果、視聴した大学生から肯定的な評価を得ていること、加えて、視覚教材の肯定的な印象が高まると、規範意識が高まり友人のデート DV へ積極的に対処することが確認できた。しかしながら、同調査結果からは、視覚教材の課題もうかがえた。最後に、本視覚教材の持つ課題を三点指摘し、授業中に補足すべき内容について整理しておきたい。

第一の課題として、女子学生と比べて男子学生にとって感情移入しにくい内容になったということが挙げられる。アンケート調査では、視覚教材を視聴した大学生のうち、女性のほうが肯定的な印象を抱き、デート DV をする人の特徴についても理解し、デート DV を容認せず、友人のデート DV への対処としても話題を回避せずに、友人への助言を行いたいと考える傾向にあることが明らかになった。これは、視覚教材が主にデート DV の被害にあう女子学生の友人の視点で制作されたことに一因があると考えられる。もちろん、視覚教材には、加害者である航平の友人、タツヤも登場する。しかし、タツヤは、友人がデート DV の問題を抱えたときに話題を回避する傾向にある、という香川大学の男子学生の特徴を持っているため、問題解決にあたって活躍する場面はほとんどない。そのため、視聴した男子学生は、友人がデート DV の問題を抱えたときに自分がどうすべきか分からないままだったと想像できる。授業で視覚教材を視聴した後は、加害者の友人の立場でできる具体的な対応策について補足する必要がある。

第二の課題として、制作した視覚教材では、デート DV の問題を抱えた友人への対応が一事例しか示されていないことが挙げられる。視覚教材では、まどかの友人である沙希が、積極的にかかわり弁護士に相談に行く。しかし、積極的にかかわる以外の対応は明示されていないし、弁護士以外の相談先も描かれていない。本調査では、デート DV の問題を抱えた友人に対して、話題を避けないこと、助言をすること、意見を尊重することを適切な対応と設定し、質問紙を作成した。しかし、調査結果からは、デート DV を容認する場合も、否定する場合も話題を回避しやすくなり、デート DV を容認する場合は意見を尊重しやす

くなる傾向がみられた。これらの結果を解釈するのは容易ではないのだが、視覚教材の中で、それらの行動が、デート DV の問題を抱えた友人への適切な対応として明示されていないことが一因として考えられるだろう。すなわち、「話題を避けないこと」や「意見を尊重すること」が適切な対応であると視聴した学生に認識されていないため、このような結果が得られたと考えられる。そのため、授業では、話題を避けないこと、助言をすること、意見を尊重すること等、デート DV の問題を抱えた友人に対する適切な対応を具体的に説明する必要がある。また、誰もが沙希のように自ら積極的にかかわることができるわけではない。警察や配偶者暴力相談支援センター等の相談窓口についてもあわせて紹介し、周囲の大人に頼る必要性も伝えていくべきだろう。

さらに、これはアンケート調査の結果と直接関係してはいないが、第三の課題として、男性の被害について描かれていないという点も指摘できよう。内閣府の調査によれば、成人男性の約 1 割が交際相手から被害を受けたことがあるという（内閣府、2015）。本視覚教材では、男性から女性への暴力について描かれているが、実際には女性から男性への暴力もある。男子学生を加害者の友人として、女子学生を被害者の友人として描くばかりでなく、その逆もありうることを示し、対応策を説明する必要もあるだろう。

以上、アンケート調査の結果をもとに、視覚教材の教育効果と課題について考察してきた。本稿では、視覚教材を用いた具体的な教育プログラムを提示するには至っていない。しかし、すでに、主題 A 科目「キャンパスライフ入門」や「身近な生活における支援を考える」において視覚教材を用いた授業をはじめており、この点については引き続き検討を行いたい。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆さん、視覚教材制作にご協力くださった香西監督をはじめとするスタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 視覚教材制作の脚本・監督・編集については、香西志帆監督とスタッフの皆様の協力を得た。香西監督は、百十四銀行営業統括部に所属しながら瀬戸内国際芸術祭のオープニング映像の制作を手掛けられる等、高度な専門的知識と技術を有しておられる。
- 2) 本視覚教材は、香川大学 youtube チャンネルに掲載されている。「あなたの大好きな人～デート DV から守りたい～（デート DV 防止啓発動画）」
<https://www.youtube.com/watch?v=BFX1ZgEozyQ&list=PLU1xE02-olHRlfURui1rw07TJFJoLQZp1&index=1>
- 3) 本動画制作のため、香川大学生のデート DV の実態を明らかにすることを目的としたアンケート調査を実施した。

参考文献

- 内閣府男女共同参画局（2015）「男女間における暴力に関する報告書＜概要版＞」（http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-gaiyo.pdf）
＜2017年11月9日アクセス＞
- 大久保智生・西本佳代（2016）「香川大学1年生の問題行動の実態—コンプライアンス教育のための実態把握—」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第13号、41-53頁。
- 大久保智生・西本佳代・影山澄香（2017）「香川大学におけるデートDVの実態—コンプライアンス教育のための実態把握—」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第14号、85-100頁。